

宮澤賢治の童話“水仙月の四日”における雪童子の叫び

— 栄養療法の知的枠組についての研究 15 —

藤 井 義 博

Cries of the Snow Boy in *Miyazawa Kenji's Tale "Suisen-zuki no yokka"*

— A study on the paradigms of nutrition therapy 15 —

Yoshihiro FUJII

Abstract

This study was an effort to clarify in the tale “*Suisen-zuki no yokka*” what meaning the blizzard “*Suisen-zuki no yokka*” has for each of the main characters in the tale: the old snow woman, the snow boy and the child wrapped in a red blanket, and to elucidate how the snow boy saves the child's life in the blizzard, so as to determine the general relationship between formation of intrinsic reality in a human being and creation of extrinsic reality by god or goddess of nature. For this investigation, the hypothesis had been put forward that *Miyazawa Kenji*, author of and chef in “*The Restaurant of Many Orders*”, a collection of tales including the above, ask readers or customers in his restaurant to appreciate intrinsic reality formed in the characters in his tales.

Being bottled up inside her own circuits, like Narcissus in Greek mythology, the old snow woman says “*Suisen-zuki no yokka*”, so as to mean nothing but the blizzard itself that she determines to promote here and now. The snow boy takes the old snow woman's “*Suisen-zuki no yokka*” for the objective blizzard in the nighttime on the eve of *Risshun*, the first day of spring or February the 4th in the calendar year. The child wrapped in a red blanket takes the blizzard he encounters for a sleeping time dreaming of homemade candy since falling over in the storm and being covered with lots of quilts of snow. The child survives in the blizzard because of the snow boy's penetrating insight, practical knowledge and skilful actions, or cries that generate effective responses from entities in the universe: snow produced instead of spring rain by the big blue fire of the invisible Cassiopeia in response to his cry for bring spring rain, his intention to save the child, which is sensibly concealed from the old snow woman, his correct methods for preventing hypothermia of the child, and responses of both the child and father to his action resulting in the latter finding the former safe and sound covered with snow.

The relationship between formation of intrinsic reality and creation of extrinsic reality in the tale can be summarized; upon perceiving or taking account of extrinsic

所属：

藤女子大学人間生活学部食物栄養学科、人間生活学研究科食物栄養学専攻

Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Sciences, and Division of Food Science and Human Nutrition, Graduate School of Human Life Science, Fuji Women's University

reality, different intrinsic reality is formed in each of the main characters in the tale; extrinsic reality is created based upon intrinsic reality originated in god or goddess of nature, whether it is created directly by the old snow woman, a narcissistic unresponsive goddess of nature or it is created indirectly by entities in the universe that respond to kind actions, or cries of the snow boy, a willing helper god of nature. Intrinsic reality in a human being formed by perception of extrinsic reality can touch intrinsic reality originated in god or goddess of nature, because extrinsic reality is created by intrinsic reality originated in god or goddess of nature. The intrinsic reality in a human being that touches intrinsic reality in god or goddess of nature transcends subjectivity, and thus is equivalent to “*mental sketch*”, an expression by *Miyazawa Kenji* for his commonly called tales or poems, which is universal, as he claims, among all the human beings down in their hearts.

1. はじめに

宮澤賢治（1896～1933、以下、賢治と呼ぶ）は、日本を代表する詩人・童話作家として現代では国際的に知られるようになったが、生前には2つの著作だけを刊行している。すなわち心象スケッチ「春と修羅」の自費出版（1924年4月）および「水仙月の四日」を含む9篇の童話からなる童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の刊行（同年12月）である。前者は詩の形式で表現され、後者は童話形式で書かれているという意味では、それぞれ詩であり童話である。しかし賢治は前者を詩とは認識していなかった。心象スケッチの一部と把握していた。後者を賢治はイーハトヴ童話と表現している。イーハトヴ童話は、賢治の心象中に実在した岩手県について童話形式をとって表現した心象スケッチである。心象スケッチは、賢治の心象中の実在についてのスケッチすなわち「写生」である。

童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の中の童話の題名である「水仙月の四日」は、賢治の造語であるが、童話の中では暦上いつであるかは明示されない。そのため「水仙月の四日」あるいは「水仙月」の暦上の同定に関して諸説がある¹⁾。

本論は、童話の主役である雪婆んご、雪童子、赤毛布を着た子供のそれぞれにとって「水仙月の四日」という大吹雪の意味が何かをはっきりさせることおよび雪童子は吹雪の中で子供の命をどのようにして救うかを明らかにすることにより、童話「水仙月の四日」における外的真実の創造と内的真実の形成の関係を明確にする試みであった。

2. 資料と仮説

宮澤賢治の著作のテキストとして、「新校本宮澤賢治全集」全16巻、別巻1巻（筑摩書房、1995～2009年）を用いた。とりわけ、宮澤賢治の童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」のテキストとして、「新校本宮澤賢治全集」第12巻本文篇（筑摩書房、1995年）を用いた。

本論の探求のために、童話の登場人物に形成される内的真実を十分に味わうことが、この童話を含む童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の作者でありシェフである宮澤賢治の読者すなわち彼の料理店の客への注文であるとの仮説を立てた。

3. “the red blanket”

童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の六篇の童話を含む宮澤賢治の童話二十四篇を英語に翻訳した John Bester の著作 “Once and forever” において「水仙月の四日」は “the red blanket” のタイトルにて収録されている²⁾。これは、この物語に登場する子供が着ている「赤毛布」を指している。John Bester は、タイトルを “the red blanket” に変えただけでなく、童話のなかで五回、雪婆んごの言葉として出てくる「水仙月の四日」という表現をすべて省略している。例えば、「水仙月の四日だもの、一人や二人とったっていいのだよ」は、“Why, at this time of year we’ve a right to one or two at the very least.” と表現され、また「あまあいいあんばいだった。水仙月の四日がうまく済んで。」は、“It went well! A

good day indeed!”となっている。このようにこの童話のタイトルも含めて「水仙月の四日」という表現は全て省略されている。

“the red blanket”において省略されているのは、「水仙月の四日」だけではない。雪童子^{ゆきわらうす}による真っ青な空を見あげて見えない星に向かっての叫びすなわち「カシオピイア、もう水仙が咲き出すぞおまへのガラスの水車 きつきとまはせ。」および「アンドロメダ、あぜみの花が咲くぞ、おまへのランプのアルコール、しゅうしゅと噴かせ。」が全て省略されている。さらに吹雪に関する雪童子たちの会話すなわち「まあいいだらう。ほくね、どうしてもわからない。あいつはカシオペアの三つ星だらう。みんな青い火なんだらう。それなのに、どうして火がよく燃えれば、雪をよこすんだらう。」「それはね、電気菓子とおなじだよ。そら、ぐるぐるぐるまはつてゐるだらう。ザラメがみんな、ふわふわのお菓子になるねえ、だから火がよく燃えればいいんだよ。」「ああ。」が全て省略されている。

このように John Bester が省略した部分は、「水仙月の四日」という表現自体と「水仙月の四日」の吹雪の生成に関係する雪童子の叫びおよび雪童子の仲間たちとの会話である。そうすることにより“the red blanket”は、雪婆んごがもたらす大吹雪のなかで雪童子の巧妙な意図により、雪に埋もれる「赤毛布^{あかけつと}」を着た子供が実際には雪の毛布に包まれることにより生き延びる物語となっている。しかし、原文の童話「水仙月の四日」を読む者は、「水仙月の四日」と云う懐かしい言い伝えのようでいて何だかよくわからない表現の意味を考えながら読み進めることになる。そしてその思考には「水仙月の四日」の時間と空間の同定という難しい作業も含まれることになる。

4. 「水仙月の四日」の時間と空間の同定

「水仙月の四日」という表現は、この童話のタイトルでもあり、童話の本文の中ではすべて雪婆んごの言葉として四回で出てくる。一方、雪童子は、「水仙月の四日」という表現を一度も使わない。本文における「水仙月の四日」という表現は、雪婆んごのいわば独り言である。それは後述するように、雪婆んごが作用因となる大吹雪を意味する。「水仙月の四日」という大吹雪が起きる時空間の

同定は、この大吹雪が暦の上でいつのことを限定することである。

4.1. イーハトヴの水仙の開花時期と「水仙月の四日」

「水仙月の四日」をイーハトヴにおける水仙の開花時期と仮定してみる。そうすると、賢治の心中に実在した岩手県の水仙の開花が四月であることから¹⁾、「水仙月」は四月であり「水仙月の四日」は四月四日ということになる。このように「水仙月の四月」を新暦（陽暦）の四月四日とすると、それがこの童話の内容と矛盾するか否かについて以下に検討する。

雪童子らの会話に、「こんどはいつ会ふだろう。」「いつだらうねえ、しかし今年中に、もう二へんぐらゐるものだらう。」「早くいつしよに北へ帰りたね。」という一節がある。ここでは、雪童子たちが手伝うことになる大吹雪の回数が今年中にさらに二回ほどだろうと言っている。そして「早くいつしよに北へ帰りたね」は、今後起こり得る二回の大吹雪が「早く」終わることへの願いである。もし「水仙月の四日」の大吹雪が新暦（陽暦）の四月四日のことだと仮定すると、時すでに春であり、これからさらに二回も大吹雪が起きること、しかもそれが早く終わることを願うことは、話の辻褄が合わないことである。

4.2. 夜を中心とした時間の区分

「水仙月の四日」という大吹雪現象がいつ発生し、いつ最高潮に達し、そしていつ済んだかは、童話の内容から確定することができる。それは日曜日の午後、まだ三時にもならない頃に始まる。そして雪婆んごの「今日は夜の二時までやすみなしだよ。ここらは水仙月の四日なんだから、…」の表現から、夜の二時までが最高潮の時期である。そしてやっと夜明けにちかいうまく済むことになる。このように「水仙月の四日」は、日中ではなく、夜間の現象である。

夜を中心とした上代の時間の区分は、「ゆふべ」「よひ」、「よなか」、「あかつき」、「あした」である（岩波古語辞典補綴版 語彙「あした」の説明）。水仙月の四日は、「ゆふべ」の前から始まり「あかつき」に終わるできごとである。実際、雪童子らの会話では、「大丈夫だよ。眠ってるんだ。あしたあすこへほくしるしをつけておくから。（傍点

引用者)」「ああ、もう帰ろう。夜明けまでに向ふへ行かなくちや。(傍点引用者)」と表現されている。この場合の「あした」は、夜中に「水仙月の四日」があつて、その明けの朝を意味する。しかも雪童子らの会話は、夜明け前の「あかつき」のことである。雪童子らは夜を中心とした上代の時間区分のなかで生きている。

4.3. 立春からはじまる「今年」

雪童子らが夜を中心とした上代の時間区分のなかで生きていることは、「水仙月の四日」もまた上代にさかのぼる古い時節の名称であるとの把握を要請する。そうすると夜明け前の雪童子らの会話、「こんどはいつ会ふだろう。」「いつだらうねえ、しかし今年中に、もう二へんぐらゐのもんだらう。」における「今年中」の今年の開始は、新暦の一月一日ではなく、立春と考えることが妥当である。水仙月の四日の「あかつき」に会話する雪童子たちは、新年すなわち立春を迎えていることになる。立春は陽暦では二月四日頃(年によっては5日あるいは3日のこともある)であることから、雪童子たちにとって「水仙月の四日」は、陽暦の二月四日すなわち立春を迎える夜を中心に起きた大吹雪である。

5. カシオピイア、もう水仙が咲き出すぞ

「雪婆んごは、遠くへ出かけて居りました。」物語は、雪婆んごの不在の表明で始まる。雪婆んごは、イーハトヴの上空を根城とする土着の存在である。続いて雪丘の裾を、赤い毛布にくるまって一生懸命にカリメラのことを考えながら山のうちの方へ急いでいるひとりの子供が描写される。それから二匹の雪狼とその後ろを歩く雪童子が登場する。白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶった雪童子は、真っ青なそらを見あげて見えない星に、「カシオピイア、もう水仙が咲き出すぞ おまへのガラスの水車 きつきとまはせ。」「アンドロメダ、あぜみの花がもう咲くぞ、おまえのラムプのアルコール、しゅうしゅと噴かせ」と叫ぶ。ここで読者は、雪童子にしたがって「水仙月」は、水仙が咲き出す春の月だと理解することを示唆されるであろう。そして読者の多くは、その月をイーハトヴの水仙の開花時期すなわち新暦の四月と考えるであろう。しかし上述したようにこれで

は話の辻褄が合わないことになってしまう。これはどういうことなのか。白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶった雪童子は、雪婆んごのようなイーハトヴを根城とする存在ではない。実際、見えない「カシオピイア」や「アンドロメダ」に向かって叫ぶ雪童子はいわばハイカラな存在である。童話の後半で示されるようにこの雪童子は「北」が故郷である。そうすると「もう水仙が咲き出すぞ」は、イーハトヴの水仙の開花ではなく、もう「水仙月の四日」すなわち立春だぞと言っていることになる。いずれにしても読者はこの後やってくる雪婆んごの「水仙月の四日」の大吹雪と雪童子の「もう水仙が咲き出すぞ」の叫び間のいわば虚空のなかにぼんと放り出されることになる。この宙ぶらりんの状態は、「水仙月の四日」の大吹雪に遭遇する赤毛布にくるまった子供の状況と重なる。しかもこの両者にはそれぞれに呼応する外的真実が与えられる。読者には、雪童子の見えない星に向かっての「もう水仙が咲き出すぞ」の叫びに呼応するその空から波になってわくわくと降る青びかりが与えられる。子供には雪童子がぶいとなげつけた美しい黄金いろのやどりぎの枝を受けとったときいちめんに落ちてくるまっ白な雪が与えられる。

6. 雪婆んごの「水仙月の四日」

雪婆んごが物語のなかで使っている「水仙月の四日」という表現は、以下のとおりである。「今日はここらは水仙月の四日だよ。さあしつかりさ。ひゆう。」「今日は水仙月の四日だよ。ひゆう、ひゆう、ひゆう、ひゆうひゆう。」「水仙月の四日だよ、一人や二人とつたつていいんだよ。」「ここらは水仙月の四日なんだから、やすんぢやいけない。さあ、降らしておくれ。ひゆう、ひゆうひゆう、ひゆうひゆう。」「ああまあいいあんばいだつた。水仙月の四日がうまく済んで。」また、「水仙月の四日」のためにわざわざ遠くから三人の雪童子を連れてきたことについて、「…こんなに急がしいのにさ。ひゆう、ひゆう、向ふからさへわごと三人連れてきたぢやないか。さあ、降らすんだよ。ひゆう。」これら五回の表現から読み取れる雪婆んごの「水仙月の四日」は、以下の通りである。それは、①雪童子らに対する雪婆んごの命令の大義名分であり、②限定的な時間かつ空間であり、

③西から連れてきた雪童子らが知らないイーハトヴの伝統的な特別な儀式であり、④外部からの三人の雪童子らを必要とするほどの大規模な降雪の儀式であり、⑤そしてオプションとして生け贅を伴う儀式である。

6.1. 「水仙月の四日」という名の大吹雪

雪婆んごの「水仙月の四日」は、「今日」と「こちら」に展開される大吹雪である。それは陽暦の二月四日すなわち立春という客観的で特定の時間軸上の一定点に起きた大吹雪という現象ではない。雪婆んごの「水仙月の四日」は、「今日」と「こちら」に展開される大吹雪であり、それ以上でもそれ以下でもない。ここにあるのは、時空間において同定できる外的真実としての「水仙月の四日」ではない。雪婆んごの内的事実としての「水仙月の四日」である。それゆえに雪婆んごは外的事実としての「水仙月の四日」を雪童子らに説明しない。それは、説明することができないからである。

6.2. イーハトヴの古い宗教的儀式

雪婆んごの「水仙月の四日」は、オプションとして生け贅を伴う儀式である。「水仙月の四日」だもの、一人や二人とつたつていいんだよ。」は、「水仙月の四日」が、単なる大吹雪のパフォーマンスだけでなく、生け贅が必須でないにしてもオプションとして伴うことにおいて、イーハトヴの古い宗教的儀式であることを示す。「水仙月の四日」は、イーハトヴの子どもの命を奪うことをも辞さない自然の粗野なパワーを崇拝する古いタイプの儀式である。

6.3. 雪婆んごのナルシズム

雪婆んごの「水仙月の四日」の「水仙」は、ギリシア神話の泉に映った自身の影に恋焦がれたナルキッソスの水仙への変化を踏まえている。すなわち水仙は、雪婆んごによる自然の粗野なパワーを崇拝する古い儀式的遂行を、ナルキッソスの水仙への変化と照応させる縁語（縁の詞）として働いている。ナルキッソスがニンフのエコーに対して話す言葉は、彼女によってひとつひとつ反復された結果、ナルキッソスは自身の神経回路の内側に閉じ込められてしまう。その回路から解放されなかったナルキッソスは、Robert Bly の「Iron John」の少年のように³⁾、森の泉に映った自身の

“眼を”通じて、自然自体の意識に気づくことができなかった。むしろナルキッソスは、森の泉に映った自身の“顔”に恋してしまった。雪婆んごは、大吹雪という「水仙月の四日」の成就と一体化して自己愛を実現する。大吹雪をもたらそうとしている雪婆んごは、ナルキッソスのように自身の回路の内側に閉じ込められてしまっている。雪婆んごの「今日はここらは水仙月の四日だよ。さあしつかりさ。ひゆう。（傍点引用者）」は、泉に映った自身の影に恋焦がれたナルキッソスのように、雪婆んごが大吹雪の成就と一体化していることを示す。

雪婆んごの「あまあいはいんばいだつた。水仙月の四日がうまく済んで。」は、雪婆んごのナルシズムが済んだことを示す。それは、ぎらぎら光る黄金の眼が済んで、その眼は闇のなかでおかしく青く光ることで示される。泉に映った自身の影に恋焦がれたナルキッソスが水仙に変化したように、大吹雪が済んだ雪婆んごも水仙に変化した。その水仙は、晴天の立春である。

7. 雪童子の「水仙月の四日」

7.1. 雪童子とカシオペアの呼応

白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶった雪童子にとっては、雪婆んごの恐ろしい大吹雪の「水仙月の四日」は、春を告げる水仙の咲く立春以外の何物でもなかった。「カシオペア、もう水仙が咲き出すぞ おまへのガラスの水車 きつきとまはせ。」雪童子は、まっ青なそらを見あげて見えない星に叫ぶと、その空から青びかりが波になってわくわくと降る。雪童子のこの叫びとそれに対する「その空」からの呼応は、見えないものに向かっての叫びと見えないものからの呼応というこの童話のテーマの最初の実現である。それはまた、立春を前にしての春の雨乞いであり、間もなくやってくる雪婆んごの大吹雪の「水仙月の四日」に対抗しようとする雪童子の願いである。

「水仙月の四日」が終焉したときの雪童子らの会話、「ずるぶんひどかつたね。」「ああ、」「こんどはいつ会ふだらう。」「いつだらうねえ、しかし今年中に、もう二へんぐらゐるものだらう。」が示しているように、雪童子らは雪婆んごの「水仙月の四日」という表現を使おうとしていない。雪童子らの内的真実は、雪婆んごの「水仙月の四日」の

古い宗教的儀式とは異なるからである。なぜ雪童子らの内的真実は、雪婆んごの「水仙月の四日」の内的真実とは異なるのか。それは白熊の毛皮の帽子をかぶった雪童子の容姿で示される。彼は、「白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶり、顔を苹果のやうにかがやかしながら、ゆっくり歩いて」くる。活き活きとしたこどもらしい顔をしている雪童子は、白熊の毛皮の帽子をかぶっていることからイニシエーションを受けていることが示される。雪童子は「小さな心の種子」⁴⁾をもっている存在である。雪童子は、ナルシシストではない。雪婆んごの雪童子への叫びは、雪童子からの呼応を生み出すことはない。雪婆んごの「水仙月の四日」の絶対的なナルシシズムの叫びに雪童子は奴隸として従属しない。

7.2. 雪童子と赤毛布にくるまった子供との呼応

雪童子は赤毛布にくるまったこどもに、「わらひながら、手にもつてゐたやどりぎの枝を、ぷいつと」なげつける。それは、子供の目の前に落ちる。子供はびっくりして枝をひろって、きょろきょろあちこちを見まわしている。雪童子はわらって草のむちを一つひゅっと鳴らす。すると、雲もなく研きあげられたような群青の空から、まっ白な雪が、さぎの毛のように、いちめんに落ちてくる。このエピソードはどういうことか。それは子供が見えない存在から思いがけない作用を受けることを予告するエピソードであり、雪童子が自らの意志としてその作用を買って出たということである。なぜ雪童子はそれを買って出たのか。子供が雪婆んごの「水仙月の四日」に遭遇することとそのときには自身の介入が子供の運命を左右することを予知できたからである。

8. 雪童子による「水仙月の四日」への介入

8.1. 子供の声

雪童子はふと、風にけされて泣いているさっきの子供の声をきく。雪童子の瞳はちょっとおかしく燃える。しばらくたちどまって考えていたがいきなり烈しく鞭をふってそっちへ走る。けれどもそれは方向がまちがっていたらしく雪童子はずうと南の方の黒い松山にぶつかる。このエピソードは何を意味するのか。まず泣き声の大切さである。見えなくても泣き声はその内面の状況の

何かを発信することができる。泣き声を感じた者の内面の回路が回転する結果、ある情緒が点灯する（「雪童子の瞳はちよつとおかしく燃えました」）。このようにまず情緒が点灯し、それに基づいて情緒の主体はその意味を明確にする（「しばらくたちどまって考えてゐました」）。そしてその主体は、行動に結びつくある意図の実行を決意する（「いきなり烈しく鞭をふってそっちへ走つたのです」）。その意図の実行は、冷静に計画された的確な戦略の実行ではないために的をはずす（「けれどもそれは方向がちがつてゐたらしく雪童子はずうと南の方の黒い松山にぶつかりました」）。しかし大切なのはまず行動を起こし、それから再度知覚に集中することである（「雪童子は革むちをわきにはさんで耳をすましました」）。その知覚に基づいてよりの確な意図を実行する（「そんなはげしい風や雪の声の間からすきとほるやうな泣声がちらつとまた聞えてきました。雪童子はまづすぐにそっちへかけて行きました」）。

8.2. 子供に向かっての雪童子の叫び

子供の泣声に雪童子は呼応する。しかし子供は雪童子の叫びに呼応することができない。雪童子は走りながら、毛布をかぶって、うつ向けになっておいでと叫ぶ。けれどもそれは子供にはただ風の声ときこえ、そのかたちは眼に見えない。雪童子は、も一度走り抜けながら、だまってうつむけに倒れておいで、今日はそんなに寒くはないんだから凍えやしないと叫ぶ。しかし子供は口をびくびくまげて泣きながらまた起きあがろうとする。子供は、しきりにカリメラのことを考えることができる。しかし子供は風の声にそれ以上の何かを考慮することができない。子供はかたちの眼に見えない何かの存在を考慮することができない。ましてややどりぎの枝をひろったときにまっ白な雪が、さぎの毛のように、一面に落ちてきた、これらのすべてが眼に見えない雪童子の仕業であり、風の声がその同じ雪童子の叫びであるとは夢にも思っていない。

8.3. 雪童子のつきあたり

叫びがいっこうに効果をもたらさないの、雪童子は、「倒れてゐるんだよ。だめだねえ。」と、向こうからわざとひどくつきあたって子供を倒す。やってきた雪婆んごは、こどもに気づいて、「そう

そう、こつちへとつておしまひ。水仙月の四日だもの、一人や二人とつたっていいんだよ。」と叫ぶ。このとき雪童子はある方便を駆使する。それは子供を助けるという意図に基づく言動の実施である。雪童子は、わざとひどくぶつかる。これは子供を助けかつ雪婆んごを満足させる行動である。そうしながら一方では「ええ、さうです。さあ、死んでしまへ」と雪婆んごに向かって叫び、他方ではまた「倒れてゐるんだよ。動いちゃいけない。動いちゃいけないつたら。」とそっと云う。この雪童子の方便により、雪婆んごのナルシズムの行為も雪童子のこどもの救助のための準備もともにいいあんばいに進行する。

8.4. 雪童子による子供の低体温症予防

陰暦の二月の異称に、きさらぎ（衣更着、更衣、如月）がある。この月は尚寒くて着物を更に重ね着る意であるという（広辞苑 第一版）。立春の前夜の大吹雪である「水仙月の四日」は、赤毛布にくるまった子供の雪布団による衣更着の四日の物語でもある。

雪布団がどうして防寒の衣更着になるのか。大吹雪で雪に埋まって身動きできなくなった子供は、低体温症による死の一手手前にいる。一般的に、低体温症を起こす条件は、寒冷（放射）、風（対流）、濡れ（伝導）の3つであり、そのうちでも低体温症に最も影響するのは風の強さである。風は対流を早めるので、防寒すなわち放射、対流、伝導を防ぐことが不十分であれば、体温は加速度的に奪われていく。白熊の毛皮の帽子をかぶっている雪童子の「北」の故郷は、後述するように北極圏であり、厳しい故郷に育った彼は低体温症の予防手段を知っているようである。そのために雪童子が取った方法は、まず手をのばして、その赤い毛布を上からすっかりかけてやる。これは濡れ（伝導）対策である。それからこどもの赤い毛布が見えなくなるほどたくさんの雪を上からかけてやる。これは風（対流）対策の雪布団である。寒冷について、「今日はそんなに寒くないんだから凍やしない。」と雪童子は言う。寒冷（放射）についても問題がないと判断している。雪童子は、低体温症を起こす三つの条件に基づいて適切に子供を守る。

雪童子はこどもを完全に雪の中に埋めてしまったときに、「あのこどもは、ほくのやつたやどりぎをもつてゐた。」と、つぶやいて、ちょっと泣くよ

うにする。この言動は何を意味するのか。これは方便なのか。方便だとするとその意図は何か。この言動は、雪婆んごに向けての雪童子の弁明である。「あのこどもは、ほくのやつたやどりぎをもつてゐた。（傍点引用者）」は、過去形を使用することで、「ええ、さうです。さあ、死んでしまへ」と叫んだあの子供をこっちすなわち異界へとつたことを示す。なぜ泣くようにしたのか。それは、雪婆んごの「おや、おかしな子があるね」（傍点引用者）に呼応している。自分のやつたやどりぎの枝をもっているからおかしな子だと雪婆んごが云ったと判断した雪童子は、子供を救おうとしている以上、何であれ雪婆の嫌疑を回避する必要がある。そこで雪婆んごを意識しながら、事実を正直に述べるとともに、方便としてそれを受け取ったこどもの死を演出するためにちょっと泣くようにした。「ちょっと」は、こどもにはたまたまやどりぎをやっただけの関係であることを外的真実として雪婆んごに示すための方便である。そして「泣くようにした（傍点引用者）」は、それが方便の行為であることを客観的にすなわち読者に対して示す。

9. 赤毛布にくるまった子供の「水仙月の四日」

赤毛布にくるまった子供の「水仙月の四日」は、以下のごとくである。しきりにカリメラのことを考えながら雪丘の裾を、せかせかと山のうちの方へ急いでいたときに、目の前にやどりぎの枝が落ちてきた。びっくりして枝をひろってどこからきたのかきょろきょろあちこちを見回していると、突然雲のない青空からまっ白な雪がいちめんに落ちてきてきた。そのうち風が吹いてきたと思うといつの間にか烈しい吹雪になってしまった。そして風雪のために足を雪から抜けなくなってよろよろ倒れてしまい、雪に手をついて、泣きながら起きあがろうともがいていた。しかし風に突き飛ばされとうとう倒れてしまい、力もつきてもう起きあがれなくなった。風がしきりに吹いて赤毛布で体がすっぽりとおおわれた。飛んできた雪が毛布のうえにどんどんつもっていくようだった。いつの間にか眠ってしまった。夢の中でカリメラ作りをしていた。夢の中で「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」と叫ぶ声に眠りから覚めた。雪

が少し積もっていたが体を動かすことができたと思っていると、父さんが助けにきてくれた。

水仙 narcissus は、その麻酔的性質により催眠薬 narcotic の語源である。赤毛布を着たこどもの「水仙月の四日」は、睡眠すなわちカリメラの夢の中の時である。それは雪布団の寒冷防止がもたらした催眠作用による。大吹雪による低体温症の致命的影響をうまく免れたことで実現した睡眠中の夢の世界である。それはまた雪童子の立春としての「水仙月の四日」がもたらす春の再生の過程でもある。

10. やどりぎの枝

雪童子が投げて子供がひろったやどりぎの枝は、雪童子の異界と子供の人間界をとりもつ接点である。やどりぎの枝は、子供が、異界と人間界の接点が失われている状況にいることを示している。旧い儀式（祭り）としての「水仙月の四日（傍点引用者）」は、三日間の祭りの済んだ翌日すなわち後の祭りの「四日」の意味が込められている。賢治が楽しみにしていた花巻の鳥谷ヶ崎神社の祭礼⁵⁾は、毎年9月17日から三日間の行事であった⁶⁾。「どんぐりと山猫」における三日間にわたる「めんどなさいばん」⁷⁾や、また「かしはばやしの夜」の「夏祭りの第三夜」⁸⁾は、鳥谷ヶ崎神社の三日間の祭礼を基にしていると考えられる。そして「水仙月の四日」は、鳥谷ヶ崎神社の祭礼のあとの祭りの日と解釈することができる。祭礼の三日間が異界と人間界の交流が可能な特別の時空であるように、後の祭りの「四日」は、人間界と異界との間の扉が再び閉じられた日である。

雪婆んごが出かけているときのやどりぎの枝のエピソードもまた、見えないものに向かっての叫びと見えないものからの呼応という童話「水仙月の四日」のテーマを予告している。このエピソードは、その後の風にけされて泣いている子供の声を聞いて雪童子が呼応するための前提条件を形成する。なぜなら目の前に落ちた見えないものからのギフトを手にしたときに、自然がいつそう美しく輝くという経験によって、その予告が提示されるからである。そしてその提示を受けて手にしたギフトを保持することで人間界と異界との接点の構築が完了する。

子供へのギフトは、雪童子が投げたやどりぎの

枝であった。やどりぎ（viscum album）は、その実から鳥もちになる粘質物がとれる。やどりぎの枝を保持することもは、やどりぎのようにくっついてその場を離れないことにより復活し再生することの予測である。この予測の視野は広い。それは、雪婆んごの「水仙月の四日」という大吹雪のなか雪布団に包まれて眠って夢の中で生きのびることで、彼もまた雪童子のように見えないものに向かって叫び、見えないものからの呼応を受ける人間へと成熟してゆくことである。それはまた炭からの青火が燃えることでカリメラ作りを考えるこどもが、雪をよこす青い火がよく燃えるように見えない星に叫ぶ雪童子のような人間へと成長してゆくことである。

11. 叫びと呼応の物語

「カシオピア、もう水仙が咲き出すぞ おまへのガラスの水車 きつきとまはせ。」雪童子は、まっ青なそらを見あげて見えない星に叫ぶと、その空から青びかりが波になってわくわくと降る。雪婆んごが出かけていて不在のときの嵐の前の静けさにおける一見この何気ない雪童子の叫びとそれに対する「その空」からの呼応が、実は、雪婆んごの「水仙月の四日」のはじまりである。しかしそのことがわかるのは、雪婆んごの「水仙月の四日」が済んだときである。

「…ほくね、どうしてもわからない。あいつはカシオペーアの三つ星だらう。みんな青い火なんだらう。それなのに、どうして火がよく燃えれば、雪をよこすんだらう。」雪童子の疑問は、どういうことか。雪童子の叫びに見えないカシオピアが応えた。そして雨をよこそうとしてカシオピアの青い火がよく燃えた。その結果、雨は、ふわふわの雪になることで子供を包むことができた。もしもその火がよく燃えなかったならば、湿った雪に濡れてしまったこどもは致命的な低体温症になってしまったことであろう。このように赤毛布につつまれた子供が生きのびたのは呼応の連鎖による。そしてこの連鎖のはじまりは、雪童子による見えない星に向かっての叫びにまでさかのぼる。

12. 雪の生成と吹雪の形成の物語

童話「水仙月の四日」は、雪の生成と吹雪の形

成の物語でもある。カシオペイアの青い火がよく燃えると雪をよこす。このように生成された雪はどのように降雪につながるのか。この雪の生成と降雪において、雪婆んご、雪童子、雪狼はそれぞれどのような役割をもつのか。婆んごが遠くへ出かけているときに雪の生成が行われる。それは、雪童子が見えない星に向かって叫ぶことで始まる。なぜならこの叫びにカシオペイアの青い火が呼応してよく燃えることで、雪の生成がもたらされるからである。このように雪童子は、雪婆んごが不在のときに雪生成に関わる。また雪童子は、雪婆んごのいるときには、雪けむりをたてるつむじかぜ（旋風）として吹雪の形成にかかわる。雪狼は、雪童子によって制御され、局所的に吹雪をもたらし。雪婆んごは、イーハトヴに「水仙月の四日」という大吹雪をもたらし低気圧である。雪婆んごは、西からイーハトヴにやってきてそして東に去ってゆく。この雪婆んごの地球上空の移動は、イーハトヴから見ると、遠くへ出かけていた雪婆んごが西の方からやってくることになる。

13. 雪童子のアイデンティティー

この童話にはひとりの雪童子と三人の雪童子が登場する。前者は、いわばこの童話の主人公であり、彼は白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶり見えないカシオペイアに叫び、赤毛布にくるまれた子供を助ける。後者は、雪婆んごが西の方の野原から連れてきてその命令に従ひたすら降雪に励む三人の雪童子である。これらの雪童子はすべて同じ雪童子と表現されるが、両者は単数が複数かにより区別されている。前者は「雪童子」と表現され、後者は「三人の雪童子」あるいは「雪童子ら」と表現される。John Bester の “the red blanket” では、前者の雪童子は、“the Snow Boy” と単数の固有名詞（大文字表記）で表現され、後者の三人の雪童子は、“the snow boys” と複数の普通名詞（小文字表記）で表現されている。この英語表現と比較すると、賢治による雪童子の区別方法は、ひとりの雪童子を際立たせるよりもむしろ同じ雪童子の仲間であることを強調する表現である。

雪童子仲間の故郷は、雪童子たちの会話に「早くいつしよに北へ帰りたいね。」とあるように北方のどこかである。そして雪童子のかぶっている

白熊の毛皮の三角帽子は、これが白熊の生息する北極圏であることを示唆する。昨日のこどもの行動を知っている雪童子は、雪婆んごといっしょにやってきた三人の雪童子よりも早くにイーハトヴに到着している。彼は雪婆んごが北極圏から連れて来た雪童子であろう。

14. 雪童子の内面的成長

大吹雪の前には顔を苹果^{りんご}のようにかがやかしていた雪童子は、大吹雪が来ると顔いろが青ざめる。しかし風にけされて泣いているこどもの声をきくと、雪童子の瞳はちょっとおかしく燃える。そして大吹雪の中での大きな仕事を終えた後は、雪童子の頬は林檎^{りんご}のようで、その息は百合のようにかおる。一方、ぎらぎら光る黄金の眼をしていた大吹雪の最中の雪婆んごは、大吹雪が済むとその眼は闇のなかでおかしく青く光る。また、大吹雪の前からべろべろまっ赤な舌を吐いていた雪狼は、大吹雪が終わって疲れてぐったりしていたが、おきあがって大きく口をあき、その口からは青い焰がゆらゆらと燃える。このように雪童子も雪婆んごも雪狼も、大吹雪が済むとそれぞれに特徴的に顔に色彩の変化を生じる。そして雪童子だけは加えて息がかおる。これは雪童子の内面の成長を示唆する。その証は、雪童子らの会話における「大丈夫だよ。眠つてゐるんだ。あしたあそこへ僕しるしをつけておくから。」の雪童子の言葉が、その後の経過の「あした」において雪童子の叫びと行為が子供と父親からの呼応を得ることにより示される。

15. 雪童子の最後の叫び

「夜があけたから、あの子どもを起さなけあいけない。」雪童子は子供を起こすと表現するように、子供が生きていることを確信している。こどもを埋めている雪を雪狼にちらしてもらう。こどもの赤毛布のはじが、チラッと雪からでたのをみて、「もういいよ。」と叫ぶ。この叫びは、雪狼への命令の叫びである。「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」と、うしろの丘をかけあがって一本の雪けむりをたてながら叫ぶ。これは眠っているこどもを起こすための叫びである。そして「こどもはちらっとうごいたようでした（傍点引用者）」と

描写される。それは動いたのか動かなかったのかわからないほどの一瞬のかすかな動きであった。子供のこのかすかな動きは、こどもがこの雪童子の叫びをはじめて感受したからである。昨夜の大吹雪の中では、子供は雪童子の叫びに呼応することができなかった。雪童子は走りながら、毛布をかぶって、うつ向けになっておいでと叫んだ。けれどもそれは子供にはただ風の声ときこえ、そのかたちは眼に見えなかった。しかしま眠っている子供は、雪童子の叫びが聞こえた。誰の叫びかわからないものの、叫びを確かに受け取った。雪童子の投げたやどりぎの枝をこどもが受け取ると、群青の空からのまっ白な雪が、さぎの毛のようにいちめんに落ちてきて、しずかな綺麗な日曜日をいっそう美しくした。そのように、いま眠っているこどもが雪童子の叫びを受け取ると、お父さんが一生けんめいはしって来た。それは、雪童子の命令により、雪狼が雪をけたて、それを風が飛ばしてけむりようになったことへの毛皮の人（お父さん）の呼応である。「そして毛皮の人は一生けん命は走つてきました。」で、童話は終わる。父親は雪童子の意図を感受したことを示している。

16. おわりに

童話「水仙月四日」は、「水仙月の四日」という外的真実を知覚した、雪童子たち、赤毛布にくるまった子供のそれぞれにそれぞれの内的真実が形成されることを示している。それに加えて、童話「水仙月四日」は、外的真実が自然の神々の内的真実により創造されることを示す物語でもある。ここでは、二つの創造の方法が示される。ひとつは、雪婆んごのようにナルシシストで冷淡な自然の女神の内的真実からの直接的な創造である。もうひとつは、雪童子のように気のよい支援者の自然神の内的真実からの外的存在に向けた行動すなわち叫びが、宇宙の存在から効果的な呼応を生み出すことによる間接的な創造である。前者の場合は、人間界に専ら災いをもたらすが、後者の場合は幸いをもたらす。このように自然の神々の内的真実は人間に災いと幸いという対照的な外的真実をもたらす。そしてこれらの外的真実を知覚する人間において災いと幸いの内的真実が形成される。人間の内的真実は、自然の神々の内的真実に触れることができる。なぜなら外的真実は自然の神々の

内的真実に発するからである。このように自然の神々の内的真実に触れる人間の内的真実は、主観を超越している。

童話集「注文の多い料理店」の広告ちらし（宮澤賢治が書いたと思われる）には、「これらは決して偽でも瑕空でも窃盗でもない。多少の再度の内省と分析とはあつても、たしかにその通りその時心象の中に現はれたものである。故にそれはどんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人たち畢竟不可解な丈である。（傍点引用者）」と記されている⁹⁾。ここに述べられている「必ず心の深部に於て万人の共通である」とは、宮澤賢治の心象スケッチは、普遍的な真実であるという表明である。その意味は、自然の神々の内的真実が外的真実を創造することから、外的真実を知覚する人間に形成される内的真実は、自然の神々の内的真実に触れることができるということである。神々の内的真実に触れる人間の内的真実は、主観を超越している。このような内的真実を宮澤賢治は心象スケッチと呼んだ。

17. 要約

本論は、童話「水仙月の四日」の主役である雪婆んご、雪童子、赤毛布を着た子供のそれぞれにとって「水仙月の四日」という大吹雪の意味が何かをはっきりさせることおよび雪童子は吹雪の中で子供の命をどのようにして救うのかを明らかにすることにより、自然の神々による外的真実の創造と人間における内的真実の形成の一般的関係を明確にする試みであった。その探求のために、童話の登場人物に形成される内的真実を十分に味わうことが、この童話を含む童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」の作者でありシェフである宮澤賢治の読者すなわち料理店の客への注文であるとの仮説を立てた。ギリシャ神話のナルキッソスのように自身の回路の内側に閉じ込められてしまっている雪婆んごは、「水仙月の四日」を今日ここに展開すると決意している大吹雪そのものという意味において使う。雪童子たちにとって雪婆んごの云う「水仙月の四日」は、立春すなわち陽暦二月四日の前夜を中心に起きた客観的な大吹雪である。赤毛布にくるまれた子供にとっての大吹雪は、吹雪の中で倒れ雪布団につつまれてし

まったなかで眠ってカリメラの夢を見ていた時である。赤毛布につつまれた子供は「水仙月の四日」の大吹雪を生きのびるのは、雪童子の洞察力と有効な知識に加えて宇宙の存在から呼応をもたらす彼の巧みな行動すなわち叫びのおかげである。それは、春の降雨を希う雪童子の叫びに呼応して見えないカシオペアの青い火が雨の代わりに雪を生成すること、雪童子の子供を救う意図が大吹雪の成就のナルシシズム的願望をもつ雪婆んごからうまく隠されること、雪童子の的確な低体温予防法が有効であること、そしてこどもと父の両者の雪童子の行動への呼応が雪に被われて無事にいるこどもの発見に導くことである。

童話における内的真実の形成と外的真実の創造の関係を要約して述べる。外的真実を知覚することで、童話のそれぞれの主役において異なる内的真実が形成される。一方、外的真実は、雪婆んごと言うナルシシストで冷淡な自然の女神による直接的な創造であろうと、雪童子と云う心からの支援者である自然の神の優しい行動すなわち叫びに呼応する宇宙の存在による間接的な創造であろうと、自然の神や女神の内的真実に基づいて創造される。このように自然の神々の内的真実が外的真実を創造することから、外的真実を知覚する人間に形成される内的真実は、自然の神々の内的真実に触れることができる。それゆえに神々の内的真実に触れる人間の内的真実は、主観を超越しており、その意味において、必ず心の深部において万

人の共通であると宮澤賢治が主張する心象スケッチ（彼のいわゆる童話や詩に対する彼自身による表現）と等価である。

引用文献

1. 原 子朗. 定本 宮澤賢治語彙辞典. 筑摩書房；東京：2013.
2. Miyazawa Kenji, translated by John Bester. Once and Forever-the tales of Kenji miyazawa. Kodansha International; Tokyo: 1993.
3. Robert Bly. Iron John: a book about men. p.49
4. 藤井義博. 宮澤賢治の“注文の多い料理店”と“山男の四月”の相補性——栄養療法の知的枠組についての研究 13——. 藤女子大学人間生活学部紀要. 53：35-46, 2016.
5. 宮澤清六, 他編. 新校本宮澤賢治全集. 第 16 卷（下）補遺・資料 年譜篇. 筑摩書房；東京：2001.
6. 關登久也. 宮澤賢治素描. 協栄出版社；東京：1943. p.151.
7. 藤井義博. 宮澤賢治の“注文の多い料理店”と“山男の四月”の相補性——栄養療法の知的枠組についての研究 13——. 藤女子大学人間生活学部紀要. 53：35-46, 2016.
8. 藤井義博. 宮澤賢治の童話“かしはばやしの夜”の画描きの正体——栄養療法の知的枠組についての研究 14——. 藤女子大学人間生活学部紀要. 54：35-48, 2017.
9. 宮澤清六, 他編. 新校本宮澤賢治全集. 第 12 卷童話 [V]・劇・その他 異稿篇. 筑摩書房；東京：1995.